

朱^{しゆ}の絶筆 鮎川哲也



Yoshiyuki



しゅ ぜつぴつ
朱の絶筆

あゆかわてつ や
鮎川哲也

© Tetsuya Ayukawa 1994



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1994年6月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——東洋印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。 (庫)

ISBN4-06-185683-9

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



講談社文庫

しゅう
朱の絶筆

鮎川哲也

講談社

目次

第一部

A
の
1

5

B
の
1

24

C
の
1

36

D
の
1

39

E
の
1

48

F
の
1

58

G
の
1

61

第二部

一 鐘は横に……

67

二 第一の殺人

99

三 動機の問題

136

四	カーテンの紐	172
五	オルゴール	209
六	第二の殺人	248
七	深夜の珈琲	282
八	髭づらの男たち	314
九	第四の殺人	347
十	無目的殺人	387
	(読者諸氏への挑戦)	404
十一	真相	405
	解説	440

新保博久

440 405 404 387 347 314 282 248 209 172

第一部

Aの1

通いなれた道であつた。結婚して世帯を持つてから七年間、夕食の買い物に商店街へ行くときも、雨の日には夫を駅へ迎えに行くときも、一人っ子の明彦^{あきひこ}を幼稚園へ連れて行くときも、この道を通らなくてはならなかった。そこは彼女にとって生活の一部であり、あるいは肉体の一部であるといつても言い過ぎではない。なのに、ある日その道と訣別^{けつべつ}して以来（そうだ、夫の家を出て行くときも、この道を通つたのだ。身の廻りの品を詰めたスーツケース一個をさげて……）、一度と足を踏み入れることがなかった。しかしそれも当然のことだろう。夫と子供を捨てたからには、夫の手前、そして世間の手前、戻れるものでもない。というよりも、彼女のほうからふたたびこの道を歩くまいと固く決心していた。それほど、あの男に参つていたのである。

彼女の夫の泰彦^{やすひこ}は、近くの高校の美術の教師をつとめていた。美術大学で油絵を学んだというがずばぬけた才能はないらしく、夏休みに制作した作品が秋の美術展覧会の選をパスしたためしはない。だが泰彦は落選しても懲り^こもせず、また翌年の夏休みになるとキャンバ

スに向かうのであった。

そうした夫の態度を、はじめのうちは不屈な精神の持主であると考えて、尊敬の眼で見えていた。が、それが三回四回とくり返されてくると、次第に輕蔑の眼差しでながめるように変わってきた。元來が勝気の彼女は、何事にせよ相手を批判的に見る習慣が身についていたのだが、それは夫に対しても例外ではなかった。というよりも、四六時中鼻をつき合わせている夫であるだけに、その一挙手一投足が批判の対象になるのだ。そしていったん侮蔑の眼で見るとなつたが最後、夫のすることは何から何までが気に入らなかつた。この美術の教師はマイホーム主義の、そうした人間に共通した温厚で誠実な性格の持主であつたのだが、彼女にしてみると、温厚篤実といった長所が、愚図でのろまな短所のように思えてくる。マイホーム主義はこのうえなく結構なことであるにもかかわらず、キャバレー遊び一つできない臆病者であり、甲斐性のない男のように見えてくるのであった。

夫は、職場である学校でもおとなしかつた。生徒を叱つたことがないというし、職員会議の席上でも自己を主張するようなラジカルな発言はしたことがないという噂だつた。その話をしてくれたのは同僚の数学教師の夫人で、讚美の意味をこめて「おとなしい先生ですことねえ」といったのだけれど、彼女にはそれが皮肉に聞こえた。そうしたことも、夫を疎ましく思う原因の一つであつた。

夫婦のあいだに子供は一人しか生まれなかつた。だがこの息子の明彦が父親にそっくりの消極的な性格を持っていた。いつだったかデパートの屋上に連れて行つてやると、喜んで滑

り台のところまで走って行ったものの、そこにいた同年輩の女の児にひと睨みされただけで、べそをかいいて駆け戻って来たことがある。そうした明彦を見るにつけ、負けず嫌いの彼女は、意気地なしの息子が腹立たしくてならなかった。目の大きなところが夫にそっくりであり、それはむしろ長所だとも考えてよいはずであるのに、この母親はほそい眉をひそめた。彼女にとっては、何であれ夫と似ていることが氣にくわなかったのである。

彼女が夫を軽んじる理由の一つに、自分では氣づいているかどうかは判らないが、収入が夫よりも多いということがあった。本来ならば内助の功として美談になるところであるのに、美談となり得なかったのは、彼女がそれを鼻にかけて家庭内で我儘一杯に振る舞ったからだだった。彼女はアラビアンナイトのなかの驕慢な女王のようであり、そしてその夫は女王にかしづく黒人の奴隷のようであった。泰彦はタバコを吸わない。だが、家庭内では灰皿の掃除をするのがこの夫の役目であった。細君が、細巻タバコを日に三十本もふかすからだ。おとなしい夫は、自宅においてさえ、自己を主張するようなことはなかったのである。

彼女には、その頃からすでに蒸発の地下は出来上がっていた。夫を捨てることにも子供を捨てることにも、何の未練もない。誰かすてきな男性から誘いがかかれば、その夜のうちにでも家を出るつもりでいた。実際にその機会がめぐってきたのは、それからさらに一年と一カ月のちのことであつたけれども――。

Aの2

彼女がその男とはじめて口をきき合ったのは、まるで安物の三文小説さんもんせつの設定に似て、新幹線の座席に隣り合つて腰をかけたときだった。厳密な意味からすればどちらもそのときが初対面ではなく、いままでにも遠くで顔を合わせる機会は何度かあったが、口をきくまでには至らなかったのである。

「なんだ、あなたか」

そのときの男の第一声を、彼女はいまでもはつきりと覚えている。古い表現を用いれば、彼女はいまこの男から弊履へいりのごとく捨てられそうな立場にあるのだが、それでいながら最初の会話を忘れ得ないのは、やはり未練があるからだろうか。それとも、それが女の性さがというものなのであろうか。

当時この男は三十半なかばになるかならないかの齡頃としごろであつた。髪に脂氣あぶらけがなく、一見したところでは服飾に無頓着むとんちゃくのように思えるが、よく見るとじつに金のかかったいいセンスの持主であることが判る。そのがっしりとした体格にしても、色の浅黒い精力的な風貌にしても、見るからに活動的であり精力的であり、霸氣はきのない夫とは比べものにならない。彼女は、そこに強烈な男性を感じた。これがほんとうの男というものののだ、と思つた。

上り列車が京都を過ぎる頃から、二人はかなり打ち解けた気持ちになつて、まだ幾分いくぶんは他人行儀であるにせよ、共通した知人を題材にしてはずんだ会話を交わしていた。他人から見

れば夫婦だと思われるかもしれない。そう考えると、満更でもない気持ちになる。そして、こういう男性を夫に持てたら女冥利につきるのではないだろうか、と思つてみる。相手の男がまだ独身でいることを、最近の週刊誌が何かで読んだ記憶があったからである。

名古屋あたりで手を触れ合った。そして静岡を通過したときには、熱海で途中下車の約束をするまでに親しくなつていた。ちよつと見にはタフな男だが、外觀に似ず女性には親切で、そのうえ優しかった。彼女が細巻のタバコを唇にはさむと、間髪をいれずライターをカチリと鳴らして、鼻の先にロンスンの赤い炎をさしだしてくれるといった按配である。万事に気のきかない泰彦とは段違いだった。夫ときたら、彼女がタバコをくわえて一年間つ立っていても、火をつけてくれようとはしない。その知恵が湧かないのである。

熱海ではひと風呂浴びてとびきり旨い夕食を食べると、ふたたび「ごだま」に乗つて帰京するという約束であつたが、体があたたまりアルコールが全身にまわつてくると、夫と子供のことがひどく疎ましいものに思われてきた。どうにでもなれという心境で、誘われるままに一泊した。

彼女が世田谷区三軒茶屋の夫の家を出たのは、それから三カ月のことになる。今後の住居は田端にあるので、方角はまるで違つていた。夫と顔を合わせることもまずないといつてよい。加えてあと一、二年もすれば田端のマンションを出て近県に家を建てる計画になっている。すでに土地は購入してあつた。そうなれば東京とも訣別するわけであり、泰彦とのあいだの距離はいよいよ大きくなる。それまでの辛抱だ、と自分に言い聞かせた。彼女は、

電車のなかか路上でひよつこり夫と顔を合わせ、夫に強引に連れ帰られることを何よりも心配していたのである。いや、あの勇氣に欠けた泰彦のことだから腕ずくで引きずっていくということはあり得ないが、こつそりと尾行して、田端のマンションを突き止めるかもしれない。家出した当初、彼女はそう考えて用心深く過ごした。仕事るとき以外は、つとめて外出することを避けていた。

二度ほど、新聞で妻に呼びかける広告を見かけたことがある。そのときの彼女は情にほだされてホロリとなるようなことはせず、逆に、未練たらしく広告を出した夫を軽蔑した。と同時に、ある種の優越感をくすぐられて、むしろ上機嫌でフランス語のシャンソンを唄っていた。

半年ほど過ぎてから、書留便で、籍を抜いてくれるようにいつてやった。六カ月もたてば、泰彦も諦めて、請求されたとおりの手続をとってくれるものと計算していたのである。しかし、いままなお思い切れずに恋々としているようだったら、頭から一喝してやるつもりだった。この夫には、命令形で怒鳴りつけることが何よりも効果的であることを、七年間に及ぶ結婚生活で完全に呑み込んでいたからである。

泰彦からの返事は一週間ほどで届いた。夫がどんな女々しいことを書いてくるであろうかと思ひながら封を開けてみると、案に相違して、あっさりと離婚をみとめてくれたばかりでなく、淡々とした筆致で、妻であった女の多幸を祈る旨が書き添えられていた。文面を読んだかぎりではもうすっかり冷静さを取り戻したようであり、予想されたような未練たらしい

態度はどこにも見られなかった。彼女は拍子^{ひょうし}抜けのした思いでしばらく杳然とつつ立っていた。

Aの3

彼女が自分の誤算に気づいたのは、あたらしい夫の篠崎豪輔^{しのざきごうすけ}が入籍を拒んだときのことである。いままで豪輔の前で籍の問題が話に出たことはなく、それは彼女のほうがつとめて触れることを避けていたからだだった。前夫とのあいだにある程度の冷却期間をおくことがぜひとも必要であり、そのため籍を抜くわけにはいかなかったのだが、彼女はそれをつねに負い目を感じていたのである。だから、泰彦が彼女の申し入れをあつさり聞き入れてくれたことは、豪輔にとつてもグッドニュースであるに違いない。彼女は頭からそう決め込んで、外出から帰宅した豪輔がまだ服も脱がないうちに、はずんだ声で報告した。

意外にも豪輔の反応は冷淡だった。

「よせよせ、つまらん」

「あら、なにをおっしゃるのよ」

「そんな形式的なことは止めろといっているんだ。おれときみとは結婚式もあげなかったが、それでいいと思っている。問題は夫婦間の愛にある。どれほど豪華な式をあげても、別れるやつはすぐに別れるものだ」

早口でまくしたてた。顔が怒ったように赤くなっている。その怒った顔の背後に、チラと

狼狽の色が走ったように思えた。もしかすると、と彼女は考える。豪輔は自分の目をぬすんで浮気をしているのではあるまいか。

豪輔は自由業である。もう少しくわしくいえば作家であり、もつと正確にいうならば以前は放送作家であったが、現在はマスコミで華々しく活躍している小説家であった。放送作家時代のことはよく知らないけれど、ホームドラマの作家として売れっ子であり、それにつれて収入もかなりなものだったという。

しかし、放送作家の悲哀は苦心して書いた作品がオンエアされると、それきり永遠に消えてしまい、後には何も残らないことにある。つねづね豪輔はそれを虚しく感じていた。残るものを書きたいと思っていた。たとい読み捨てになってもいいから、少なくとも紙に印刷されるような作品を書いてみたい、そう念じていたのである。その思いは、台本作家としての名声が喧伝されるのと比例して、いよいよ大きくふくれ上がっていった。

彼が、とある中間誌で推理小説募集の記事を目にしたのは、その頃のことである。「優秀なる新人出でよ！」という呼びかけを、豪輔は福音のごとくに聞いた。このチャンスに賭けよう！ 失敗しても元々だ。成功したら推理小説を踏み台にして、さらに高く飛躍するのだ！

多くの台本作家は文章がアライと評されているのだが、豪輔は例外であった。しかも筆が早く描写が的確で、ヴォキャブラリーが豊富だった。つまり、生まれながらにして小説家の才能を身にそなえていたことになる。

応募作品が入選して活字となったのがそれから半年後のことであり、それからさらに半年たった時分には、豪輔は押しもおされもせぬ流行作家になっていた。出版は推理小説であつたけれど、せまい枠に入れられることを嫌つてあらゆるジャンルの創作をこころみ、それはすべてひろい読者層に受け容れられた。多忙になるにつれてたまには愚作を書くこともあるが、読者は寛大であり、どれほど凡作であつてもそれが豪輔の名で発表されれば、少し大袈裟な表現をすると、彼らは随喜の涙をこぼして読むのである。

一緒に生活するようになってから知つたことだが、豪輔は月の半分をホテルで暮らしていた。締切りが迫ると編集者が彼を拉致してホテルに缶詰にするからである。ときには、自宅の仕事をするといふ世間話などに興じてしまい能率が下がるといつて、自分からホテルにこもることもあつた。浮気をする機会はいくらでもある。

同棲してみても判つたことだけれども、豪輔は相手が女性であれば老若美醜を問わず、つねに親切であり優しかつた。それを、自分だけが対象であると思ひ込んでいたところに、彼女の大きな誤算があつた。マンションに来て四週間も過ぎた頃から彼女は自分の思い違いに気づいて、ときどきふつと嫌な予感におびえることがないでもなく、そのために早く入籍して正式の夫婦になりたいと念じていた。

彼女は一喝されたからといって引き下がるような意気地のない女性ではない。おりを見てもう一度その件を持ち出そうと考えているうちに、また機会がめぐつてきた。前回から数えて六日目のことで、その夜の豪輔は出版社の招待でかなり酔い、いい機嫌で帰宅した。もう

夜中の二時を過ぎており、送つて来た編集長と出版部長とは気をきかせて扉口で挨拶をする
と、そのまま帰つて行つたのである。

豪輔は酔うと機嫌がよくなるたちで、その夜も目尻を下げて恵比須三郎えびすさぶろうのような顔をして
いた。手伝つて服を脱がせ、シャワーを浴びさせた後、居間のソファにすわつたところでお
もむろに例のことを切り出した。豪輔が上機嫌だったのは、その直前までであつた。一瞬、
形相ぎやうそうが変わつた。

「形式主義は嫌いだとあれほどいつたのが判わらないのか！」

「でも、これは形式じゃないのよ。結婚式はしないならしないでいいけど、お籍は入れない
わけにはいかないわ」

「問題は愛情だといつたはずだ」

「でも——」

「何がでもだ。いつておくが、おれは一人の女に束縛されるのが嫌いなんだ。女ばかりじゃ
ない、あらゆるものに束縛されるのが大嫌いなんだ。いいか、覚えておけ。きみが泣いて頼
んだところでおれの気持ちは変わらない。おれが好きなのは自由だ。自由に発言し、自由に
振る舞い、自由に行動する、これがおれの生き甲斐だ。その自由にブレーキをかけるものが
あれば、おれは断乎として闘う」

「あなた酔つていらつしやるのよ」

「何を基準にして酔つているというのかね。おれはワインの二本ぐらいで酔つぱらいはしな

い。たとい酔っているにせよ、その程度のアアルコールで頭の回転がにぶるような、そんなお粗末な脳じゃないんだ。もう一度宣言するが、自由を侵すものとは断乎として闘う。相手がファシストであろうが女房であろうが、変わりはない！」

「でも——」

「黙れ」

「黙りません」

途端に彼女の頬がピシヤンと派手な音をたてて鳴り、それをきっかけに同棲してはじめての喧嘩となった。壁が厚いからプライバシーを侵される心配がないというのがこのマンションの客寄せの文句なのだが、それでも夜中によその部屋のトイレの水音がはっきりと聞こえてくることがある。それを考えて、二人とも声の大きくならぬように、セーブした声で言い合った。

一時間ほどやり合って疲れてしまい、どちらからともなく一時休戦となつてべつべつのベッドに入った。が、それで平和が戻ったわけではない。翌日、ホテルに仕事に行くといつて出た豪輔は、それきり一週間たつても帰つて来なかったからである。いつてみれば二人は持久戦に入つたも同様であつた。そして八日目にホテルに電話をかけると、豪輔はその朝チェックアウトしており、行き先は知れなかった。ようやく彼女は、重大な局面を迎えたことに気づいたのである。

流行作家の豪輔のことだから、その所在は、出版社に訊ねればすぐに判るはずであつた。